

村野次郎創刊

香蘭

二〇二二年(令和四年)一月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十九卷第一号



2022年(令和4年)1月号

第99卷

第1号

通卷1093号



香 蘭

2022年(令和4年)1月号
第99巻 第1号 通巻1093号

目 次

| | | |
|--|----------------------------|--|
| | 村野次郎作品 私の愛誦歌(77) | 中村 かよ子 |
| | 2022年 年頭メッセージ 居合わせる人たちへ | 千々和 久幸 |
| | 作品 | 2 |
| | 一 | 3 |
| | 二 | 23 |
| | 三 | 30 |
| | 推薦香蘭集 | 38 |
| | 香蘭集 | 39 |
| | 作品一特選(十一月号) | 飯島・市川・川原・斎藤(俊)・鈴木(桂)・関口(静)・手塚・満木・宮原 |
| | 作品二、三特選(十一月号) | 江口・小原・庄司・杉山・中井・中島(紘)・藤本・武藤・小笹・田中(あ)・三神 |
| | 村野次郎への旅(141) | 千々和 久幸 |
| | 一頁公論(8) 近くて遠い台湾―もう一度訪ねたい場所 | 宮口 弘美 |
| | 七首抄(十一月号) | 相川・三澤・小山・菊地(篤) |
| | 私の読む現代短歌(11) 「絶唱志向」の岡部桂一郎 | 田中 あさひ |
| | エッセイ・自由研究 橋で繋がる町と私 | 平川 良枝 |
| | 焦点(十一月号) ユーモアのある歌 | 川原 優子 |
| | 作品評(十一月号) | 鈴木 桂子 |
| | 作品一 | 村上 美智代 |
| | 作品二 | 中島 紘子 |
| | 作品三 | 中村 陽子 |
| | 香蘭集 | 田中 あさひ |
| | 耳言あれこれ(2) | 黒羽(紘)・佐伯・市川・柏原(陽) |
| | 緑地帯 | 丸山 三枝子 |
| | 明宝研究会 第一二二回十月例会 | 62 |
| | 他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 | 66 |
| | 歌会及び会合・会員消息・他 | 76 |
| | 編集後記・新宿日記 | 80 |
| | 令和四年度 香蘭新人賞作品募集 | 85 |
| | 表紙絵 | 和雄 |
| | 中村 陽子「浮遊」 | 目次・緑地帯カット |
| | 和雄 | 表三 |

中 村 かよ子

昨夜一夜凝りて作りしわが歌を朝明に見れば

はかなかりけり

『樗風集』

この歌は村野先生の処女歌集『樗風集』の中の、昭和十年、「梅雨の頃」の章の冒頭に見つけた歌である。読んだ瞬間、くすりとして以後頭から離れない歌となった。えっ、先生でもそんなことがあるの？と思わずため口で語りかけてしまいそうになる。若かりし頃の先生が未だそこに居られる、息遣いが聞こえてきそうな気がするのだ。

私が短歌という表現方法に出会って十年ちよつと、この歌のような情景を何度味わったことだろう。短歌会の仲間達ともしよつちゅうそう言い合っている。時代がどう変わろうと、それはまるで昨日の私の心のようである。

歌集の巻末記には「時流に捉へられることより自己本然の姿を表現すべき」と書かれている。時流に乗り遅れまいとする私への誡めとしよう。清廉で気負いのない先生の歌の中で、私はこの歌に先生の普段着を感じている。

（短歌新聞社文庫『樗風集』18頁に所収。『村野次郎三百首』には収録されていない）

居合わせる人たちへ

「香蘭」短歌会代表 千々和 久 幸

明けましておめでとうございます。2023年を先取りして、ひと言ご挨拶を申し上げます。短歌結社「香蘭」は、2023年（令和5）には創刊100周年を迎える。わたしたちは偶然にその節目に居合わせることになるだろう。

わたしはかつて結社誌は大いなるマンネリズムの所産である、と言った。だからマンネリズムは排すべし、と言ったのではない。むしろそのマンネリズムの力を反力に変え、その悪弊を除去することを考えようとしたからである。

ここでいうマンネリズムとは、前例を単純反復することだけが目的化し、組織が獨創性を失って硬直化しても、なお持続している状態を指す。馴染みの顔ぶれが、同じような暮らしを同じような歌に詠み、相変わらずの日々を送っていること、安らぎと親しみ、この安堵感を共有することが結社の存在意義の一つであることは間違いない。

しかしこのマンネリズムは、打破すべき壁でもあることも忘れてはならない。安堵感に自足しているだけでは生氣と前進への意欲が失われ、結社は衰退しやがては消滅する。積極的に新陳代謝を促し、清新な組織として生生発展していくことがその真の姿である。

一〇〇年前、「香蘭」の創立者の念頭にあったのは、村野次郎の師であった北原白秋の提唱した「格調と品格」を重んずる新浪漫主義であった。しかし白秋の歌風がそのまま「香蘭」に継承された訳ではなかった。一〇〇年の間に基調としての「格調と品格」は堅持されたが、個々の歌風はそれぞれの自由な個性によって多彩な展開を見た。

このたびの一〇〇周年に居合わせる人たちは、先達の作歌への精進と努力に学び、それを自らの作品に生かす機会にして欲しい。そのことが伝統を守り、ひいては先達への感謝と敬意に繋がると信ずる。居合わせたことは偶然であっても、この偶然を必然として自らの表現領域の拡大に務めよう。さあ皆で一〇〇周年の前祝いを、乾杯だ、乾杯！

四 選 者 の 作 品

夢の廢墟

平塚 千々和 久幸

三階の書齋と同じ高さまで向かいのビルの建ち上がりくる肉を焼く匂いカレーを煮る匂い日を置き隣家より及びくる一人の生死を思い文学を思い木枯らしに足を取らるる

見残せる夢の廢墟に立ち尽くし現に鳴けるコオロギを聞く待つ者のなければ終バス降りてより銀漢ゆつくり仰ぎて帰る

小雨降る道玄坂で別れたりドラマに遠きひと日の終り

残さるる者が悲しいこの朝をいつものようにホトトギス鳴く面会は未だ叶わず病棟の妻を案じて年ひとつ越す

風のない夜

東 京 桜 井 京 子

マンションのシンボルツリーの月桂樹なにごともなく秋に入りたりコロナ禍のまへの暮らしに戻るのか戻つて何せむ風すこし出づとんがつて生きてるあなた用心をせよと囁くりユウゼツランがとほつてはいけなるところを跨いでは柵を壊すはたくしである駆け出さば今なら乗れる然はさあれ運命論をわれは信ぜず誰に似てゐるのかおまへは風の中ただいっほんの銀泥の木よ

われの手に余るしろもの白ゴーヤ甘辛く煮て酔を加へたが仕事終え顎までお湯につかる夜じんわり秋がしみてくるなり

青き大島

横 浜 渡 辺 礼比子

カーテンに芝刈る夫の影ほうし時とし映り世はこともなし鎌倉の歌会の窓に見えいたる大島いまし青く暮れゆく

先ほどのラインメールに誤字ありとラインまた来る日照雨降る午後珍しき景と眺めぬ散歩路に爺婆若きら子ら連れ立つを癒えぬまま出席したる理事会に一番元気な人らしわれは今もなお互みに他所の庭先を通る人らのあるらし谷戸は

わたくしの誕生日の花「夢」とかや夢は食べねど赤まは食ぶ君に借りし本の余白の書き込みの「すなり」の「す」はも終止形とぞ

マスクの時代

鎌 倉 香 山 静 子

池の面の半ば素枯れし蓮の葉をあまねく照らす秋の日差しは時折は緋鯉も混じりて泳ぎある斉園の鯉のゆたかなる日々柿ひとつ残して暮れるわが庭に今年は来ないリスもカラスも前の歯を抜けどマスクを堂々としてよき時世と歯科医は笑ふ日本はマスクの時代が続くでせう歯科医は語る淡々としてマスク続きで口紅の売上げ減りました 店員は嘆くマスクを付けて赤子よりはるかに小き掌を見せて守宮はゆふべの窓を離れず鎌倉から新宿までの一時間車窓に遊ぶ雲を追ひつづ

作品一特選



(十一月号作品から)

香山 静子 選

十七年前のこと

川崎 飯島 智恵子

おさな孫二人連れゆくバス・ツアー夏の一日よつつがなくあれ
海ぞいに宿の見えきて松並木とぎれようよう鴨川に着く
水しぶき除けのビニール・コート着て海豚いるかのシヨをひたすらに待つ
ママの土産に買っていきたい枇杷ゼリー一巡するもまだ決まらない
昼前に「子豚のレース」は終わったと聞きつつ入るマザー牧場
仰向けにレジヤシートに寝ころんで夜空彩る火花見上ぐる
・お孫さんとの懐かしい思い出に浸る作者。

ことしの八月

東京 市川 義和

コロナ禍のことしの八月二度目なり酷暑のなかのマスク苦ならず
緊急事態きんぎょのなかに強行の五輪とは かてて加へて酷暑のなかに
マスクして髭の見えぬをよしとして髭剃り怠る日々続けをり
思ひたち無精ひげ剃る十五日けふから朝々剃ると決めたり
真夏でも日本酒お燗で呑むといふSさんの顔浮かび来る夕に
小池真理子渾身作る書き下ろしの小説をけさ一気に読み終ふ

題名は「神よ憐みたまえ」なりマタイ受難曲から取りしとふ
・コロナ禍の日常をつぶさに詠んでいる。

おもてなし

川越 川原 優子

「おもてなし」なんてはしゃぎし日もありき もてなす客なき東京五輪
期待されメダル逃せる選手らの眠れぬ長き夜を思いぬ

品位なき男の極みアスリートの金のメダルに鬩りつくなど
新型のコロナが攻める大東京ああ呆気なく医療崩壊

土砂崩れ行方不明のテロップにわが名と同じ優子さんいる
強風に大木煽られいようと地面を這ってヤブガラシ伸ぶ

アブラゼミ幾つも仰向けに死んでいる朝から焼けつく歩道をゆけば
・東京五輪とその後の東京周辺を描いている。

バスポート

鎌倉 斎藤 俊子

父のしていし一つ一つを習いとし最後の迎え火に盆の整う
えのころ草ゆらしてバッタ飛びゆくを追いつつ農道の近径帰る
気がつけば十年用のバスポートとうに切れてる日々が過ぎたり
もう終りと思っていたるが今朝一輪希望のように芙蓉の開く
思いのほかいい風生れて手離せぬ現の暑さを大きく扇ぐ
黒髪をかきあげながら応えいるメダルラッシュの五輪の映像
賛否両論に悶悶したる五輪なれ 終ればコロナに勝ったこととぞ
・日常を多角的に詠んでいて興味深い。

風

西宮 鈴木 桂子

〈思川の岸边〉ながめて通ひたるわが青春の栃木女子高

教科書に『舞姫』を読む。(自我)といふもの不思議を教師語れど如何せん(自我)なるもの分からねばそれより国語苦手となりぬこれやこの格差社会の真ん中に七十過ぎてパートに働く

蟬のこゑびたりと止めばなにがなしこの世しーんと遠くなりたり(人を見たら感染^{うつ}と思へ)休み明けコロナにまみれて働く娘から汗ばめる夜道にひそかこほろぎのすずしきこゑす 秋が来てある
・理智と抒情が渾然一体となっている。

菱形の空 鎌倉 関口 静子

マスク下に真赤な口紅してゆくも誰にも知られずひとひの終はる山道の途中に掘られし獣落^{しおと}しわが背丈よりなほ深きらし
串刺しのウインナーの並びあるやうなガマの穂池に群生す
空蟬に意志あるごとく前足の爪がインゲンの葉を強く掴みぬ
抜け殻はインゲンの葉にしがみつき羽化した蟬はどこへ行つたか
柿の葉と皇帝ダリアの狭間より見ゆる小さな菱形の空
総選挙は来月辺りか唐突に旧友よりのメールの届く

・自然を見る目に優しさが滲み出ている。

夏を迎ふ 伊達 手塚 春世

道の辺の白き小花を打ちはじむ夏告ぐる雨に蟻のせはしく
白き服濡れるを庇ひ蝦夷梅雨に友と走りし下校時ありき
醒めてひとり臥して独りの明けくれにえぞ梅雨とふが池に輪をかく
夜が明けてゆく静けさに雨のあり北国の夏近きを告げて
羽たたむ蝶をかばひて葉の二枚細く降る雨流し続ける

ゴンドラの人の作業衣水色の濃くなりゆくを小雨に見上ぐ
羽搏きて鴨の二羽が飛びたてり川面打つ雨たがひに散らして
・孤の淋しさが滲み出ている。

死に急ぐ蟬 川越 満木 好美

開催の危ぶまれたる五輪なり選手も観客も生き生きとして
コロナ禍の東京五輪は無観客それでも増える感染者数
電線を支えて今日も立つ電柱職場の細き窓に見ており
八本の電線支え電柱が頑張っている職場にわれも
死に急ぐ蟬多く見つべランダに道に仰向く八月半ば

いつか来る死はまだ遠しわが夫は海へ散骨われは樹木葬
包丁をあてればパリッと割れにけりわれが育てし太き胡瓜は
・生きとし生けるものの死を深く追求。

とんどの匂い 倉敷 宮原 迪恵

故郷の夢に出でて火があがり覚めて残れるとんどの匂い
初夏^{はつな}の庭にどくだみ白く咲き故郷の家はいよいよ遠し
テレビ見てスーパードに行き短歌^{うた}つくり蟬穴のぞくわれのひと日よ
広辞苑として手紙を書き終えぬ心はいかなる言葉にまさる
午後六時そろそろ孫の帰るころ好みのトンカツたつぷり揚げん
雨のひと日短歌^{うた}のひとつも出来なくて仕方なくて米をとぎおり
指を汚し万年筆にインク入れ十代からのわれの不器用
・心から短歌が好きらしい作者が見える。

作品二、三特選



(十一月号作品から)

渡辺 礼比子 選

〈作品二〉

カナカナになる

柏 江口 絹代

カナカナになるほかほかはない淋しさが夏の夕べに訪れてくる
立秋を過ぎて咲きいるひるがおが雨に打たれて首下げたまま
雑草を抜くうち夏の日が暮れて最晩年が後ろ向きになる
路地裏に古着屋ありて窓ぎわにタータンチェックのシャツが張り付く
この母はそなたやすくは死なないと思えどワクチン二回目を打つ
・作者自身がのびのびと創作を楽しむ姿勢が伝わる。

人 流

鎌倉 小原 裕光

〈人流〉は人の流れかコロナ禍に大和言葉の侵されてゆく
感染の鶏は一斉処分され緊急事態を人群れてゆく
素通りで行つてくれぬか雨雲のとても気になる滞在時間
娘のもとへ旅立つ妻の後ろ影振り向くことなく街角曲がる
一日に一月分の雨降らせ警戒レベル5あちこちに出る
・社会批評の目を働かせながら、自身にひきつけて詠む。

送り火 横浜 庄司 健造

ゆうぐれのもえぎ野池の片辺かたはらほのほのと見ゆかたしる草は
街灯に照るさるすべりうす紅の色ふかまりて蜩の鳴く
送り火の由来説かれて少女子は揺るるけむりを見上げておりぬ
すじ雲の片方かたえ茜にそまるころ二百十日の風よぎりゆく
長雨のすき間に届く太陽に顔をもたげるひまわりの花

・抑制された表現に滲む味わいがある。ラ行音のリフレインが心地よい。

灯ともしびつく日 横浜 杉山 伊都子

今まさに報い受けつつ嘆きつつ(平穩)とふことひたに求める
子や孫にすまぬと思ふ荒れし地球この後のことに思ひ及ばず
あたりまへのこといつの日か懐かしみ胸ともしびに灯つく日もあらむ
はかなげな芙蓉の映る水たまり水輪が見せる異界の入口
異国には〈惑星の小径〉あるとききはろぼるとして夢澄みとほる
・危機感を持って現代社会の諸相を捉える。一首目の思いは切実。

西瓜記念日 宇治 中井 房江

朝日歌壇に小笹さんの歌を読みトーチキスとう秘儀を知りたり
町内会に入るメリットデメリット教えよと言う越し来たる人
反り返り球となるまで咲き尽くす鹿の子ゆり花粉つけたるままに
わが畑の初生り西瓜七キロ超八月一日西瓜記念日
ごく甘の黒皮西瓜「タヒチ」はもゴーガン思わす真つ赤な果肉
段ボールベッド壊され(選手らにケガなく良かった)企業あつぱれ
・作者の磊落な性格の所産のごとき大西瓜、そして明快な歌の調べ。

平和饅頭 別府 中島 絃子

核兵器保有すべきとう声の高まりゆくや「平和武典」

いらんかえ、平和まんじゅういらんかえ、大安売りの平和饅頭

フエアウエーに鴉たわむれ球がとぶ今日七十六回敗戦記念日

「あ——」と体中の息を吐ききり「うん」と納めて父は逝きたり

「阿——」と体中の息を吐ききり「咩」と納めて我も逝きたし

あまに油とトマトを薬に血圧と対話するわれ楽しからずや

・反骨精神旺盛な作者。逆説的な表現に説得力が籠る。

梅雨最中わが藤の木に巣作りのつがいの鳩よ頑張れ頑張れ

近寄りて巣を見上ぐれば鳴きもせず雛の小さき目に見られたり

頭がふたつ並んで親を待つており照る日くもる日、雨の降る日も

親鳥の容姿となりて巣立ちたる二羽が揃いてわが庭巡る

鳩に巣を貸したる藤にかえり花 雛誕生を祝いて二房ふたつ

・小さなドラマが感動的。細やかな観察眼が生きている。

ママチャリを下りてみどり児胸に抱きニレの木陰に乳ふくませる

パンくずの最後の一片呑みこんで軽鳴われに尻を向けたり

走行中うしろが見づらくなつてきた自転車免許も返上するか

甥っ子の定年祝いに白黒のリバーシブルのネクタイ贈る

某女より川越の銘菓を贈らるる一生終の転居祝いに

・身体感覚にこだわりを見せる。詩情豊かな一首目がいい。

〈作品三〉

イソヒヨドリ 鎌倉 小笹 岐美子

早朝に窓近く鳴く青き鳥美声の主はイソヒヨドリか

鳴く声に心惹かれし鳥の名を知りたる後は親しみの増す

窓近く高らかになくイソヒヨドリ震える羽は海の色なす

休業の貼り紙のあるカフェの前腰の高さに雑草伸びる

店やめたコーヒーショップのマスターは老いたる母の車椅子押す

・人間心理の機微に触れた二首目、下句の転換が鮮やかな四首目に注目。

狗尾草の穂 取手 田中 あさひ

廃屋の門口に白きはな咲かせわれをみおろし立つ藪茗荷

羽毛鶏頭ばかりの世なり風ふけば花の羽毛はほよほよ靡く

山鳩の尽きぬなやみは聞きながしこの遊星の行く末おもふ

朝日子の目ざめむまでの畑仕事わが鼻も口も被ひつくして

水溜りを攻めて三歳の夏休み狗尾草の穂を一本にぎり

・対象を客観的に捉える訓練を積んでいる作者。秋の情感の滲む一連。

庭草を引く手休めて黙禱の耳に八月六日の蕨蚊

終戦の日の黙禱へ合図待つオハグロトンボ迷い舞う庭

遠花火ひとつも聞かせずゆく夏の送り火を焚くたしか去年も

広場からおけさも音頭も届かない子供太鼓の途切れ途切れも

まあいいかコマダのドアまでひとつ傘洪る素振りの妻と小走り

・抑制が効いていながら、印象鮮明な歌。

大正期の「香蘭」（二）

（前稿に引き続き大正十五年（1926年）一月号の「香蘭」を読んでいる。）

村野先生が愉しそうによく口にされた噂の歌人、杉浦翠子の「枯草」八首を見てみよう。

この作品は北原白秋の次に掲載されており、白秋及び村野先生が杉浦翠子を高く評価されていたことが解る。

枯草

杉浦 翠子

①おのづから堤防の草生に路着きて踏みつけし草の冬枯れ續く

②堤防を被ふ短き草の葉のとがりするどくなりぬ霜くる前を

③冬枯れし草は荒べり我が敷きていこへる膝を刺す穂のあるよ

この頃

④歌の道に我世はつひに亡ぶとも命あるまは悲しみてゆかむ

⑤明暮れて我が悲しさを見るつまのなに、さ

千々和久幸

びしも我をなだめて

⑥慰めにとりいでにけるを泣きにけり何し見にけむ古き手紙を

⑦しかじかと我をなだむる我がつまの言のはかなるひとり悲しさ

⑧叱られし夢見てさめておびゆるなり聴く物音の絶えにし夜半かな

一読そのくつきりした歌の輪郭は、作者の闊達な性格まで見えるようだ。年齢は村野先生より四歳年下だから、この作品発表当時は二十八歳か。

①③は冬の景色を背景にした季節への思い、④⑧は夫とのある日のこころ模様を詠んだもの。ともに一直線に詠みくだして余情は浅く、晦渋なところは無い。

枯草を詠んでもそれが外側の自然を叙述するだけに終わらず、どこかに作者の感情が顔

を覗かす。③の結句などにはちよつぱり悪戯ごころが覗いてそれが愛嬌になっている。

一方の「この頃」の④には、すでに作者と歌の関わりを遠望して、短歌が「業余のすさび」でないことを（謙遜することなく）正面切って宣言している。この年齢でここまでの覚悟とは、よほど芯の強い人だと思ふ。

わたしはこの二、三句から反射的に吉田松陰の辞世とされている一首を思い出した。それは「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」だが、共に捨て身の生き方を一たとえそれが若さゆえの激情であつても一口に出来る信念を天晴れだと思ふ。

わたしは未だに短歌とは愛憎半ばし半信半疑だから、このような一直線の覚悟や信念が羨ましい。話を戻そう。

これまでも何度か書いてきたが、ここでも④⑤の「悲しみて」「悲しさを」は勝手な思い込みで読んでしまふが、⑥の「泣きにけり」、⑦の「悲しさ」は、対応する具体が見えないだけにいまひとつもかしい。

当時の歌にこんな表現を多く見た気がするが、仲間はこれで共鳴できたのだろう。それほどに仲間同士の人間関係が濃密なものだった

たのか、それともこの時代の短歌がこのような朦朧たる表現を許容したものかは、さらに多くの歌を読んでみないと輕輕には結論が出せない。

杉浦翠子は同号に「近頃感銘した歌」と題して次のようなエッセイを書いている。

私は、生涯歌を作らうと云ふ決心がぐらつき初めた爲に、この頃は人様の歌を讀まない。アララギも或時まで讀んだけれども、あれを讀んで居ると、諸姉、諸兄たちの歌にも著しい進歩が無いと思ふのに、あまりに早く、私を見限つてしまつた方達を私は恨めしくて堪らなくなる。(以下略)

このエッセイは齋藤茂吉の一首を感銘した歌として鑑賞し、同時に自作にも茂吉に近い心境の歌があるとして比較、検討したものである。ここでも翠子の気性の激しさと言うか、天真爛漫な自尊心を見たのだったが、わたしの関心は別のところにあつた。

それは先に引いた④の歌と関わる。④では短歌への永遠の愛が、エッセイではその愛のぐらつきが同時、同号に発表されていたこと

への戸惑いである。それも若い歌人の奔放自在な激情はかくのごときと知つてしまえば、格別驚くほどのことではあるまいが、

いま一つはエッセイから窺える破天荒とも思える翠子のエネルギーと、果敢な行動力である。翠子は当初は北原白秋に入門したが、

大正五年(1916年)にはアララギに入会、そして同会を破門のかたちで大正十二年(1923年)に退会するという経歴の持主。そのような歌人の作品が面白くならう筈はあるまい。という、わたしの野次馬根性が翠子をつい深追いすることになった。

ところでいま一人、冬野木枯の歌を引いておこう。

初冬の頃

冬野 木枯

①霜とけて山路しめれりどん栗の落實ころがる足にさはりて

②冬がれの庭樹の枝にか、りたる桐のおち葉の風に鳴る寒さ

③朝さむき屋根の霜とけて聳する音ひそかなり部屋にこもれば

④日もすがら風あれければ庭のおち葉扉かけによりてたまりたるかも

⑤玻璃戸越しさす日ぞぬくし炬燵べにこまを廻はして子と遊ぶ我は

⑥水涸れて久しかるらしこの川の石間の草は實をむすびたり

⑦貧しかる夕餉をはむと並べたる茶碗はふれて音のさびしさ

翠子の歌と並べればその木訥さ、手堅さがよく解る。一連を讀んで思い出したのだが、「冬野木枯」という作者のペンネーム(本名は城取清張?)が、作風をよく表しているとうことだ。

その眼は身近な自然と、自宅の佇まいから離れない。歌うべき対象を正面から丁寧、克明になぞっているという印象である。ここでは我が子以外の他人も、身辺の向こう側にある社会も歌われることはない。

まさしく「冬野」の光景であり、聞こえてくるのは風に鳴る「木枯」の音である。かつてわたしは会員に選者の作風を問われて、冬野先生なら「自然詠」でしょうと失敬なことを言った記憶がある。

全国大会の折であったか、その冬野先生も木枯らしの遠くへ行つてしまわれた。